

滋賀県立大学 研究シーズ集

Research Seeds **2021**



滋賀県立大学

滋賀県立大学 研究シーズ集2021の発刊にあたり

「研究シーズ集 2021」をお届けします。

大学には、教育・研究に加えて、地域社会への貢献が求められています。本学の産学連携センターは、地域と大学を結ぶ窓口として、地域連携や産官学連携の推進のために積極的に活動しています。

このたび、本学教員の研究活動やその成果を地域や産業界の皆様にご覧いただき、広く活用していただくために、「研究シーズ集 2021」を作成しました。共同研究や受託研究、技術相談の「シーズ」としてご利用ください。本シーズ集が、イノベーションの創出や地域社会の発展に少しでも貢献できれば幸いです。

なお、このシーズ集は今後当センターのホームページにも掲載する予定です。

あわせて御利用ください。

2021年7月

公立大学法人滋賀県立大学
産学連携センター長 安原 治

目 次

〈研究シーズ〉

学部学科等	職名	氏名	タイトル	ページ	
環境科学部	環境生態学科	教授	浦部 美佐子	陸水域における寄生生物の分類・生態学的研究	1
	環境政策・計画学科	教授	上河原 献二	侵略的外来生物管理制度に関する国際比較	2
	生物資源管理学科	教授	大久保 卓也	琵琶湖集水域の人間活動と環境との調和をめざした工学研究	3
		教授	須戸 幹	持続可能な農業生産と水環境における農薬の残留	4
		教授	泉 泰弘	気候変動や自然災害を克服し安定的な食料生産を旨とす	5
		准教授	清水 顕史	栄養ストレス強靱化に寄与する野生イネ遺伝資源の探索	6
工学部	電子システム工学科	講師	番 貴彦	脳機能模倣素子など次世代微細素子の開発	7
人間文化学部	地域文化学科	教授	亀井 若菜	絵画を読み解く	8
		教授	佐藤 亜聖	地域資源としての石造物	9
	生活デザイン学科	講師	徐 慧	視覚伝達デザイン、グラフィックデザイン、エディトリアルデザイン、イラストレーション	10
	人間関係学科	教授	高梨 克也	日常生活場面でのコミュニケーションと身体動作	11
	国際コミュニケーション学科	准教授	河 かおる	滋賀県における在日朝鮮人史	12
人間看護学部	人間看護学科	講師	関 恵子	触れるケアの定量化、手技教育支援システムの開発 および腰痛のある看護職者の就業支援	13
		講師	千田 美紀子	看護従事者育成に関する研究	14
		教授	古株 ひろみ	子どもの気持ちに寄り添う	15
		教授	横井 和美	ホリスティックケアにおける音楽療法と看護の協働	16
		准教授	岡本 紀子	地域在住高齢者の肺炎予防	17
		講師	片山 将宏	脳卒中サバイバーのセルフマネジメントプログラム開発	18
		講師	松井 宏樹	フレイル状態にある高齢者への意思決定支援	19
		教授	新井 香奈子	地域包括ケアの時代における地域・在宅看護の専門性	20
		助手	國丸 修平	がん患者への意思決定支援	21
全校共通教育推進機構	講師	近藤 佑樹	2010年代以降の自伝的アメリカ文学作品における対テロ戦争と身体的文化史的研究	22	

〈研究者別 研究課題・キーワード一覧〉

23-26

※SDGs目標別の研究シーズ：次頁からのSDGs目次を参照してください。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



SDGs 目次

〈SDGs目標〉



2. 飢餓をゼロ

飢餓に終止符を打ち、食料の安定確保と栄養状態の改善を達成するとともに、持続可能な農業を推進する

学部学科等	職名	氏名	タイトル	ページ
環境科学部 生物資源管理学科	教授	須戸 幹	持続可能な農業生産と水環境における農業の残留	4
	教授	泉 泰弘	気候変動や自然災害を克服し安定的な食料生産を目指す	5
	准教授	清水 顕史	栄養ストレス強靱化に寄与する野生イネ遺伝資源の探索	6

〈研究者別 研究課題・キーワード一覧〉

23-26

〈SDGs目標〉



3. すべての人に健康と福祉を

あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する

学部学科等	職名	氏名	タイトル	ページ
人間看護学部 人間看護学科	講師	関 恵子	触れるケアの定量化、手技教育支援システムの開発 および腰痛のある看護職者の就業支援	13
	講師	千田 美紀子	看護従事者育成に関する研究	14
	教授	古株 ひろみ	子どもの気持ちに寄り添う	15
	教授	横井 和美	ホリスティックケアにおける音楽療法と看護の協働	16
	准教授	岡本 紀子	地域在住高齢者の肺炎予防	17
	講師	片山 将宏	脳卒中サバイバーのセルフマネジメントプログラム開発	18
	講師	松井 宏樹	フレイル状態にある高齢者への意思決定支援	19
	教授	新井 香奈子	地域包括ケアの時代における地域・在宅看護の専門性	20
	助手	國丸 修平	がん患者への意思決定支援	21

〈研究者別 研究課題・キーワード一覧〉

23-26

〈SDGs目標〉



4. 質の高い教育をみんなに

すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する

学部学科等	職名	氏名	タイトル	ページ
人文学部 国際コミュニケーション学科	准教授	河 かおる	滋賀県における在日朝鮮人史	12
人間看護学部 人間看護学科	講師	関 恵子	触れるケアの定量化、手技教育支援システムの開発 および腰痛のある看護職者の就業支援	13
	教授	横井 和美	ホリスティックケアにおける音楽療法と看護の協働	16

〈研究者別 研究課題・キーワード一覧〉

23-26

〈SDGs目標〉



5. ジェンダー平等を実現しよう

ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る

学部学科等	職名	氏名	タイトル	ページ
人文学部 国際コミュニケーション学科	教授	亀井 若菜	絵画を読み解く	8
	准教授	河 かおる	滋賀県における在日朝鮮人史	12
全学共通教育推進機構	講師	近藤 佑樹	2010年代以降の自伝的アメリカ文学作品における対テロ戦争と身体性の文化史的研究	22

〈研究者別 研究課題・キーワード一覧〉

23-26

SDGs 目次

〈SDGs目標〉



7. エネルギーをみんなに そしてクリーンに

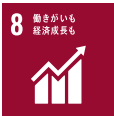
すべての人々に手ごろで信頼でき、持続可能かつ近代的なエネルギーへのアクセスを確保する

学部学科等	職名	氏名	タイトル	ページ
工学部 電子システム工学科	講師	番 貴彦	脳機能模倣素子など次世代微細素子の開発	7

〈研究者別 研究課題・キーワード一覧〉

23-26

〈SDGs目標〉



8. 働きがいも経済成長も

すべての人のための持続的、包摂的かつ持続可能な経済成長、生産的な完全雇用およびディーセント・ワーク（働きがいのある人間らしい仕事）を推進する

学部学科等	職名	氏名	タイトル	ページ
人文学 間化部 人間関係学科	教授	高梨 克也	日常生活場面でのコミュニケーションと身体動作	11

〈研究者別 研究課題・キーワード一覧〉

23-26

〈SDGs目標〉



9. 産業と技術革新の基盤をつくろう

強靱なインフラを整備し、包摂的で持続可能な産業化を推進するとともに、技術革新の拡大を図る

学部学科等	職名	氏名	タイトル	ページ
環境学部 生物資源管理学科	教授	泉 泰弘	気候変動や自然災害を克服し安定的な食料生産を目指す	5
工学部 電子システム工学科	講師	番 貴彦	脳機能模倣素子など次世代微細素子の開発	7
人文学 間化部 生活デザイン学科	講師	徐 慧	視覚伝達デザイン、グラフィックデザイン、エディトリアルデザイン、イラストレーション	10

〈研究者別 研究課題・キーワード一覧〉

23-26

〈SDGs目標〉



10. 人や国の不平等をなくそう

国内および国家間の格差を是正する

学部学科等	職名	氏名	タイトル	ページ
人文学 間化部 地域文化学科	教授	亀井 若菜	絵画を読み解く	8
人文学 間化部 国際コミュニケーション学科	准教授	河 かおる	滋賀県における在日朝鮮人史	12
人看護学 間化部 人間看護学科	講師	関 恵子	触れるケアの定量化、手技教育支援システムの開発 および腰痛のある看護職者の就業支援	13
全学共通教育推進機	講師	近藤 佑樹	2010年代以降の自伝的アメリカ文学作品における対テロ戦争と身体性の文化史的研究	22

〈研究者別 研究課題・キーワード一覧〉

23-26

〈SDGs目標〉



11. 住み続けられるまちづくりを

都市と人間の居住地を包摂的、安全、強靱かつ持続可能にする

学部学科等	職名	氏名	タイトル	ページ
人文学 間化部 地域文化学科	教授	佐藤 亜聖	地域資源としての石造物	9
人文学 間化部 人間関係学科	教授	高梨 克也	日常生活場面でのコミュニケーションと身体動作	11
人看護学 間化部 人間看護学科	准教授	岡本 紀子	地域在住高齢者の肺炎予防	17
人看護学 間化部 人間看護学科	教授	新井 香奈子	地域包括ケアの時代における地域・在宅看護の専門性	20

〈研究者別 研究課題・キーワード一覧〉

23-26

SDGs 目次

(SDGs目標)



12. つくる責任 つかう責任

持続可能な消費と生産のパターンを確保する

	学部学科等	職名	氏名	タイトル	ページ
環境学部	生物資源管理学科	教授	須戸 幹	持続可能な農業生産と水環境における農業の残留	4
工学部	電子システム工学科	講師	番 貴彦	脳機能模倣素子など次世代微細素子の開発	7
人間学部	生活デザイン学科	講師	徐 慧	視覚伝達デザイン、グラフィックデザイン、エディトリアルデザイン、イラストレーション	10

〈研究者別 研究課題・キーワード一覧〉

23-26

(SDGs目標)



13. 気候変動に具体的な対策を

気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る

	学部学科等	職名	氏名	タイトル	ページ
環境学部	生物資源管理学科	教授	泉 泰弘	気候変動や自然災害を克服し安定的な食料生産を目指す	5

〈研究者別 研究課題・キーワード一覧〉

23-26

(SDGs目標)



14. 海の豊かさを守ろう

海洋と海洋資源を持続可能な開発に向けて保全し、持続可能な形で利用する

	学部学科等	職名	氏名	タイトル	ページ
環境学部	環境生態学科	教授	浦部 美佐子	陸水域における寄生物の分類・生態学的研究	1
	生物資源管理学科	教授	大久保 卓也	琵琶湖集水域の人間活動と環境との調和をめざした工学研究	3

〈研究者別 研究課題・キーワード一覧〉

23-26

(SDGs目標)



15. 陸の豊かさを守ろう

陸上生態系の保護、回復および持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、土地劣化の阻止および逆転、ならびに生物多様性損失の阻止を図る

	学部学科等	職名	氏名	タイトル	ページ
環境学部	環境政策・計画学科	教授	上河原 献二	侵略的外来生物管理制度に関する国際比較	2
		教授	大久保 卓也	琵琶湖集水域の人間活動と環境との調和をめざした工学研究	3
	生物資源管理学科	教授	須戸 幹	持続可能な農業生産と水環境における農業の残留	4

〈研究者別 研究課題・キーワード一覧〉

23-26

(SDGs目標)



16. 平和と公正をすべての人に

持続可能な開発に向けて平和で包摂的な社会を推進し、すべての人に司法へのアクセスを提供するとともに、あらゆるレベルにおいて効果的で責任ある包摂的な制度を構築する

	学部学科等	職名	氏名	タイトル	ページ
人文学部	地域文化学科	教授	亀井 若菜	絵画を読み解く	8

〈研究者別 研究課題・キーワード一覧〉

23-26

(SDGs目標)



17. パートナーシップで目標を達成しよう

持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する

	学部学科等	職名	氏名	タイトル	ページ
人間文化学部	生活デザイン学科	講師	徐 慧	視覚伝達デザイン、グラフィックデザイン、エディトリアルデザイン、イラストレーション	10
	人間関係学科	教授	高梨 克也	日常生活場面でのコミュニケーションと身体動作	11

〈研究者別 研究課題・キーワード一覧〉

23-26

陸水域における寄生生物の分類・生態学的研究

関連するSDGsの国際目標



環境科学部 環境生態学科 教授 浦部 美佐子

研究分野：陸水生物学、寄生虫学

琵琶湖とその周辺河川を中心に、魚類、貝類、両生爬虫類などにみられる寄生虫の分類・生態学的研究をしています。寄生虫は複雑な生活史をもち、生態系と深い繋がりががあります。また、まだ研究があまり進んでおらず、新種発見や生活史の解明といった新発見が大いに期待できる生物でもあります。また、外来無脊椎動物（貝類や寄生生物）の研究も行っております。滋賀の河川や琵琶湖沿岸域の生態系の保全や生物相などに関してアドバイスすることが可能で、滋賀県の公共事業評価監視委員会、環境影響調査審査会等で水生生物の専門家としての委員を務めた経歴があります。

■淡水生物の寄生虫の分類および生活史研究

・未知のことが多い淡水の魚貝類、両生爬虫類等の寄生虫（吸虫、線虫など）の分類および生活史の研究を進め、琵琶湖の生物多様性の再評価を行っています。



滋賀県産コイから発見されたコイフタゴムシ

■外来貝類・外来寄生虫の生態研究

・外来貝類や寄生虫の防除のための基礎研究として、その生態について解明をしています。物流の発達につれて淡水生物の外来種が多くみられるようになってきました。それらが在来種にどのような影響を与えるか、また防除の手法や必要性に関する研究を行っています。



特定外来生物カワヒバリガイ



外来寄生虫（ナマズ腹口吸虫）によって引き起こされた魚病

侵略的外来生物管理制度に関する国際比較

関連するSDGsの国際目標



環境科学部 環境政策・計画学科 教授 上河原 献二

研究分野：環境法、環境政策

概要：侵略的外来生物は生物多様性保全の主要な脅威の一つとなっていますが、その対策制度は、世界でも2000年以降に発展してきた若い政策分野です。日本と自然条件の近い先進国である英仏との比較研究を進めています。

■侵略的外来水生植物管理法制度発展に関する比較研究

・琵琶湖や手賀沼で大繁殖して問題となっているオオバナミズキンバイを事例としてフランス・イングランド・日本における侵入の歴史、法制度（取引等禁止、現場管理責任の所在、除草剤使用など）について比較研究を行いました。イングランドは、土地所有者責任制度や除草剤の厳格な管理の下での活用などにより、早期対応と封じ込めに成功しています。2020年には3カ国比較論文をフランス・イングランド・日本の研究者たちと共著で国際誌に発表しました。研究の成果が、日本における制度見直しに活かされることを期待しています。本年度もオンラインでワークショップを開催する予定です。イングランドにおける生物防除技術の開発や、フランス・イングランドでの専門家・活動家たちの全国組織などまだご紹介できていない部分もあります。



2014年7月琵琶湖矢橋中間水路

■侵略外来生物管理制度における「迅速な対応」成立に関する社会的条件に関する研究

・侵略的外来生物管理は拡散する前に迅速に対応することが大事であることは国際的定説です。そのことは常識でも分かることです。しかし、人間社会とりわけ官僚機構は政治的に重要なことから優先順位を付けて対応していくので、小さい問題は見過ごされてしまいます。私はそれを「迅速な対応のパラドックス」と呼んでいます。ではどのような場合には迅速な対応は成り立つのでしょうか。そのことを、比較的成功していると思われるツマアカスズメバチの例をオオバナミズキンバイの場合と比較して、フランス・イングランド・日本で調査するため科学研究費補助金をいただいています。あいにくのコロナ禍で現地調査は思うに任せませんが、遠隔から現地専門家達に調査していきたいと考えています。



2015年9月フランス・ブルターニュ

琵琶湖集水域の人間活動と環境との調和をめざした工学研究



環境科学部 生物資源管理学科 教授 大久保 卓也

研究分野 環境工学・生態工学・水質工学

http://www.ses.usp.ac.jp/shigen/staff/stf_ohkubo.htm

本研究室では、琵琶湖や河川の水質と生態系の保全を進めるための基礎および応用研究を進めています。具体的なテーマとしては、①在来魚貝類の保全方法に関する研究（人工産卵床、人工魚礁等）、②農業濁水や農薬の生物への影響評価、③農地における農業濁水や窒素・リンの管理方法に関する研究などを進めています。

■在来魚減少の原因解明と対策に関わる研究

現在、本研究室では、琵琶湖で問題となっている在来魚減少の原因解明と対策検討に関する研究を進めています。具体的な研究としては、水質、底質（河床材）、流れ、水際植生などの環境条件と在来魚生息数との関係を把握し、どのような環境条件が在来魚の生息にとって望ましいのかを検討しています。

（参考資料：<https://www.usp.ac.jp/info/v170/>）



人工産卵床の効果調査



■水、物質（窒素、リン、農薬等）の挙動と魚類等の生物との関連性の把握

窒素、リンなどの物質を運んだり、水生生物の生息場所となる「水」の動きも生態系を考える上で非常に重要です。例えば、川の水が無くなったら、その場の水生生物が死ぬだけでなく、下流への水と栄養物質の供給がなくなり、下流の生態系にも影響を及ぼします。また、魚が移動できなくなり、産卵や餌の獲得にも影響を及ぼします。そのため、河川や水路で水の流れを維持できるように流域規模での水管理方法・システムを検討していくことが必要です。



人工魚礁の在来魚防御効果の調査



■農地を含めた集水域における水、物質（窒素、リン等）の挙動の把握

窒素やリンなどの栄養物質は、一時、赤潮発生などの富栄養化現象の原因として問題視され、下水道整備などの対策によって削減されてきました。しかし、それらの栄養物質は、植物プランクトン→動物プランクトン→魚貝類→人間・鳥といった食物連鎖ピラミッドを支える大事な物質でもあります。今後は、これらの栄養物質を大事な資源と捉え、水質保全、生態系保全、農業生産などを総合的に配慮し最適化していくような新たな管理方法が必要です。そのような視点で、栄養物質の管理方法について研究を進めています。



農薬の生物に対する影響評価実験



研究キーワード：在来魚保全、水質保全、流域環境管理、汚濁負荷量管理、農業濁水、農薬の生物影響

持続可能な農業生産と水環境における農薬の残留



環境科学部 生物資源管理学科 教授 須戸 幹
研究分野 環境化学

農薬は農産物の増収、品質の保持、労働力の軽減に多大に貢献していますが、一方では水環境に残留する農薬成分が生態系に影響を与えるのではと懸念されています。そこで、水環境中に残留する農薬成分の種類と濃度を調べ、さらに流出を抑える方法を研究することで、農薬と共存した持続可能な農業のあり方を探っていきます。

■水環境に残留する農薬の研究

琵琶湖集水域では農地のほとんどを水田が占めるため、琵琶湖へは水田施用農薬が流入します。水田で散布される農薬成分は数十種類以上で、新成分の投入などで年々変化しています。

実際にどのような農薬成分がどのくらい残留するのかを明らかにするため、農薬の散布時期や気象条件を考慮しながら琵琶湖に流入する大小さまざまな河川や、大学の実習船「はっさかⅡ」（2021年までは「はっさか」）を用いたフィールド調査を行っています。



河川での採水



琵琶湖での採水

■水田から水環境への流出経路に関する研究

水環境への流出を削減するためには、水田から農薬がどのような経路をたどって流出するのかを知る必要があります。

水田からの直接排水だけでなく、排水口が閉じられている時でも畦の下（土壌の中）を通過して流出することをこれまでに明らかにしました。そこで、農薬にどのような性質があれば畦の下から流出しやすいのか、流出を抑制するにはどうすればよいのかを研究しています。



畔浸透水の採水



農薬の土壌吸着実験

■農薬濃度を把握するための新しい手法の開発

河川水の残留農薬成分が生態系に与える影響を明らかにするためには、生態系が受ける農薬の量（曝露量）を正確に評価する必要があります。例えば月の平均濃度には、週1回採水した4データの平均値を用いますが、時々刻々と変化する濃度変動を正確に捉えているとは言えません。

そのため、採水の時間間隔をどんどん小さくする必要がありますが、労力と費用の点から限界があります。近年、農薬を吸着する樹脂を河川に浸して平均濃度に換算するパッシブサンプリング法が注目されています。現在は流速や水温など、さまざまな環境条件が測定値に与える影響と簡易な換算方法の提案など、実用化のための基礎的な研究を行っています。



河川浸漬後のパッシブサンプラー



パッシブサンプラーのキャリブレーション実験

気候変動や自然災害を克服し安定的な食料生産を旨す

関連するSDGsの国際目標



環境科学部 生物資源管理学科 教授 泉 泰弘

研究分野：作物学、栽培学

研究室HP：http://www.ses.usp.ac.jp/shigen/staff/stf_izumi.html

フィールドクロープ（食用作物）の生産性（単収）向上を目的とした研究を行っています。（同じ面積からより多くの収量が得られれば、その分だけ農地の使用を減らせることになり、持続的農業に貢献できます）とくに近年は頻発が予想される異常気象に対応できる農法の開発に取り組んでいます。

1. 中耕亀裂処理による水田転換ダイズの湿害軽減

我が国のダイズは水田転換畑での栽培が多いため湿害を受けやすく、とくに近年は梅雨明け以降にもゲリラ豪雨によって深刻な冠水被害が発生しています。本研究室では生育中のダイズの畝間に心土破碎ブレードを入れる「中耕亀裂処理」という新しい技術によって土壌の通気性と透水性を改善し、湿害が軽減できるのかを検証しています。



2. イネとの接触混作によるダイズの湿害軽減

アフリカでは洪水と干ばつという両極端な異常気象が頻発し食料安全保障がおびやかされようとしています。湿性環境に強いイネを近接して植える「接触混作」という農法によって現地の基幹作物であるトウジンビエの湿害が軽減されることが明らかとなりました。その技術を転換畑ダイズにも適用するべく、最適な混作条件を求めて栽培試験を行っています。



3. UFB処理水による水稻の生育促進・増収効果の検証

ウルトラファンバブル（UFB）は浮力が働かないほど直径の小さい気泡であり、その微細な泡を含んだ大量に含むUFB水は様々な領域における有用性が指摘されています。農学分野においても作物の成長促進、収量増加、品質向上を目指した研究が進められ、既に共同研究者はポットや水耕栽培で各種作物の環境ストレス緩和に効果が見られたと報告しています。そこで本学の圃場実験施設水田にUFB水作成装置を設置し、イネの生育および収量に効果があるかについての実証試験を実施しています。



近畿大学農学部作物学研究室との共同研究（1～3）、
神戸大学生物生産機械工学教育研究分野との共同研究（1～2）

栄養ストレス強靱化に寄与する野生イネ遺伝資源の探索

関連するSDGsの国際目標



環境科学部 生物資源管理学科 准教授 清水 顕史

研究分野 : 育種学

研究室HP : <http://www.eonet.ne.jp/~vor-dem-gesetz/>

近縁野生種の染色体断片置換系統群 (Introgression lines, ILs) など未利用のイネ遺伝資源を利用して、栽培イネの栄養ストレス耐性強化に役立つ遺伝子を探索している。これらイネの強靱化に役立つ遺伝子のカタログ化を進めることで、デジタル作物デザイン技術の確立を目指すプロジェクト (MS型研究開発事業) の推進に協力でき、迅速な品種開発技術の実現に貢献する。

■野生イネの持つリン欠乏ストレス耐性遺伝子の単離

イネのILs集団を、水耕、土耕 (例えば図1) および低リン水田で栽培し、リン欠乏ストレス耐性を示すILは反復親などと交配し、形質マッピングを進めている。そのうち、栽培品種コシヒカリを反復親とし *Oryza rufipogon* (IRGC104814) の断片を持つKRILsと、栽培品種いただきを反復親とし、*O. barthii* (IRGC101243) の断片を持つIBILsにおいて、低リン耐性遺伝子座領域を見出しており、これらのマップベース・クローニングを進めている。

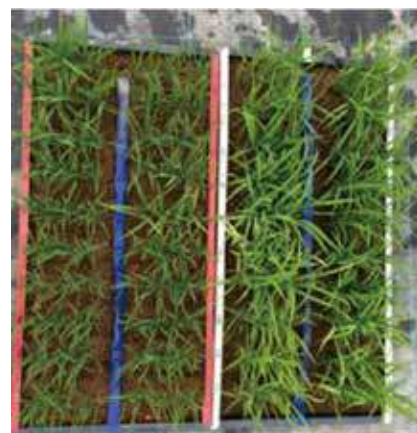


図1 土耕栽培の様子
(左: リン欠乏区、右: 標準区)

■熱帯ジャポニカ品種KHAO NOKの示す低栄養ストレス耐性

世界のイネコアコレクションなど栽培イネ遺伝資源を調べたところ、KHAO NOKという品種は40倍希釈した水耕液のような栄養が非常に少ない環境で、相対的なバイオマス生産量が高い性質を持つことが分かった。KHAO NOK (低栄養耐性) と日本晴 (標準品種) の交雑F3集団を用いてQTLseq法による耐性形質に関与する遺伝領域の推定を行うと図2に示すように染色体9と11に有意な領域を検出することができた。そこでこれら交雑後代を用いて遺伝子の単離を進める予定である (科研費基盤C、2021-2023)。

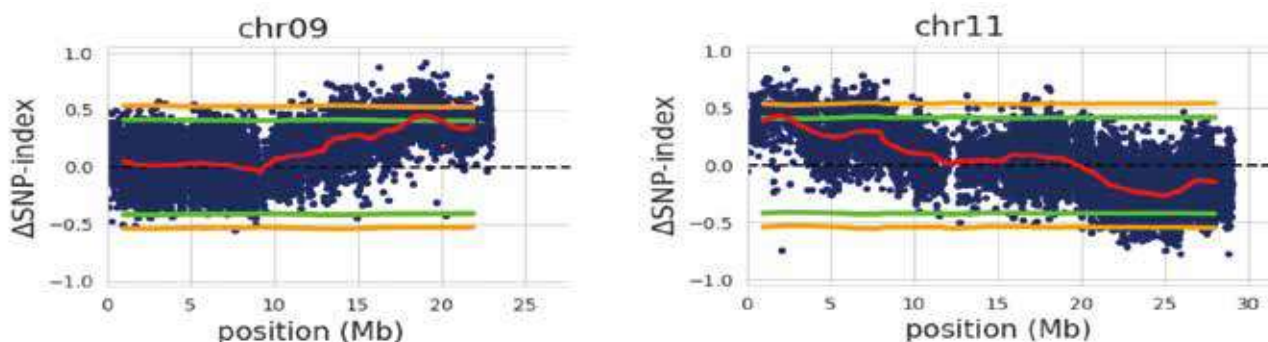


図2 日本晴×KHOA NOK₃集団のQTLseqで見出された低栄養ストレス耐性遺伝。

<共同研究>・ムーンショット (MS) 型農林水産研究開発事業 (2020-2029) (東京大学植物栄養学研究室との共同研究)
<特許>
・「発現プロファイル解析システム及びそのプログラム」特願2009-063273・特許第5286594号
(発明者) 矢野健太郎、清水顕史 (出願人) 学校法人明治大学

脳機能模倣素子など次世代微細素子の開発

関連するSDGsの国際目標



工学部 電子システム学科 講師 番 貴彦
研究分野 : 半導体デバイス、記憶素子、ナノ粒子、2次元材料

概要：私たちが利用するスマートフォンやパソコンなど電化製品には膨大な量の半導体デバイスが使われています。扱うデータ量が増え、私たちの生活が豊かになる一方で、消費する電力も増大しています。これを解決するためには新しい原理で動くデバイスや、新しい材料を使った試みが必要です。特に最近注目されているのが人間の脳を模倣したデバイスです。また、現在主流のシリコンに代わり2次元材料も新材料の一つとして研究されています。私たちの生活をより豊かに、そして環境に配慮した新しいデバイスを目指して研究していきます。

■シナプス模倣素子

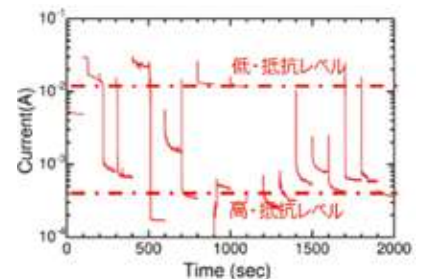
人間の脳を模したデバイス研究の一つにシナプスを再現する素子研究があります。本研究では抵抗変化素子に自己修復能を付与した新たなシナプス模倣素子を提案しています。自己修復能を持たせることで、シナプスの特徴的な働きであるつながりの強さ（伝達効率）が変化する可塑性を再現することが可能です。またナノ粒子を用いたシナプス模倣素子も作製しています。ナノ粒子の配置にはフェリチンと呼ばれる人間の体の中にもあるたんぱく質を利用しています。ナノ粒子のサイズに伝導パスが制限されるため、電流密度が上昇し、局所的に発熱しやすくなり自己修復能が働きやすくなります。人間の脳を再現したデバイスを作ることができれば非常に小さな電力で膨大な記録と高度な情報処理が可能になると期待されています。

■液体金属を用いた記憶素子

液体金属はその柔軟性から様々な分野に応用されています。特に将来的にウェアラブルデバイスなど、より私たちの身近に電子機器が偏在すると予想されることから、「硬い」素材よりも「柔らかい」素材が期待されています。最近の研究で液体金属に電圧を印加することでプログラマブルな特性が得られることが報告されています。私たちの研究では液体金属にさらに抵抗状態を記憶する機能を付与することを目的としています。実際に作製した素子では抵抗状態を記憶し、何度も書き換えることに成功しています。液体金属の応用性を広げることは社会の様式を変化させていく可能性があります。

■2次元材料MoS₂を用いたトランジスタ

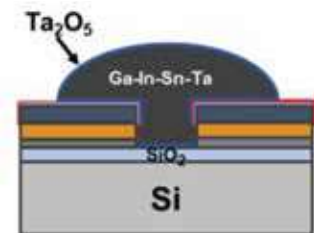
2次元材料はその名の通り平らな材料です。鉛筆などの黒鉛の材料であるグラファイトなどをテープで剥離することで得られるグラフェンのように、私たちの身近にある材料でもあります。特徴としては原子1層分の厚みまで薄くできるため、微細化に非常に適していることや、移動度と呼ばれる特性が良い材料が多いことです。私たちが扱うMoS₂（硫化モリブデン）はセンサー材料や太陽電池材料としても期待されています。私たちの研究ではトランジスタと呼ばれる微細なスイッチをMoS₂で作製しています。表面が非常に敏感であるため作製工程の影響を受けやすいのですが、トランジスタの電極構造などを先に作製し、最後にMoS₂を貼り付けることで70mV/decという特性の良いトランジスタを作製することに成功しています。



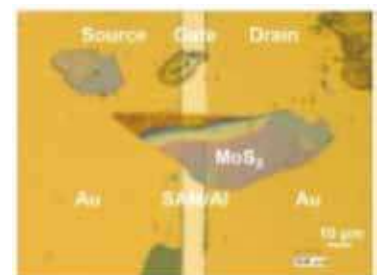
書き込みが時間経過とともに消去される特性図



作製した液体金属



液体金属記憶素子構造図



作製したMoS₂トランジスタ

絵画を読み解く

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 地域文化学科 教授 亀井 若菜

研究分野 : 日本美術史

概要：絵画を中心に日本美術史の研究をしています。中でも、中世の絵巻を主な研究対象としてきました。特に関心があるのは「女性」を描く絵や「土地」を描く絵です。近江の景観を描く「桑実寺縁起絵巻」や「唐崎の松」についても考察してきました。

■物語絵画の中の女性像

絵の中に女性は多く描かれます。女性像は、物語の主人公として、あるいは歴史上名のある人物として、またそれらを支える脇役として描かれたりします。しかし男性が主導する社会において劣位に位置づけられる女性の姿は、男性同士の力関係の中で、自分の側に置きたいもの、敵対するもの、劣位に置きたいものなどのメタファー（隠喩）としても表されます。そのため、女性像の表現や役割を丁寧に分析することによって、その背後にある社会の状況や価値観などを推測することもできます。絵を、ただ美しいものとして見るのではなく、人と人の関係性やその社会の価値観を構築するものとして捉え、研究しています。

これまでに研究の対象とした作品には、「信貴山縁起絵巻」「粉河寺縁起絵巻」「掃墨物語絵巻」などがあります。

これらの絵巻に関する研究内容は、2015年に『語りだす絵巻』という本として出版しました（ブリュッケ刊、同書は平成27年度芸術選奨文部科学大臣賞を受賞）。



著書『語りだす絵巻』
(ブリュッケ、2015年)

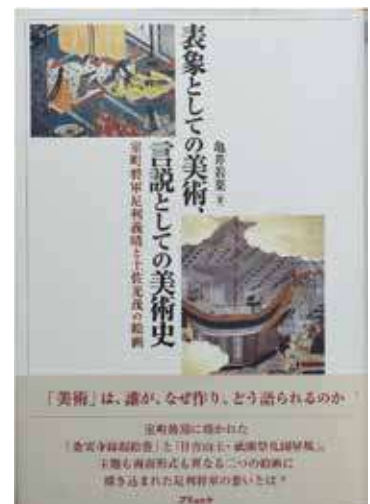
■仏教主題の絵と女性

仏教において女性はどのようなものと考えられてきたのか、絵はそれをどのように描いてきたのか、ということも研究しています。具体的には、往生や法華経の龍女成仏を主題とする物語絵画の中の女性の表現について分析しています。

■近江の景観を描く絵の研究

滋賀県の桑実寺に所蔵される「桑実寺縁起絵巻」は、天文元年（1532）に、近江の桑実寺に逃げてきていた將軍足利義晴の発願によって作られました。この絵巻には、桑実寺から望める安土山付近の景色がリアルに描かれています。実際に見える景色がなぜ描かれたのか。同時代の美術の中には、そのような表現をするものは他にありません。その理由と意味を、將軍義晴が置かれていた状況から考えました。

近江の景観に関する研究としては、近江の名所である唐崎が、一本松をシンボルとして描かれてきた歴史とその理由についても考察しました。



著書『表象としての美術、
言説としての美術史』
(ブリュッケ、2003年)

<特許・共同研究等の状況>

平成28～31年度 文部科学省 科学研究補助金 基盤研究 (C)

「中世の『伊勢物語』イメージ形成に関わる「伊勢物語絵」と文芸の総合的研究」 研究代表者

地域資源としての石造物

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 地域文化学科 教授 佐藤 亜聖

研究分野 : 考古学 文化財科学 歴史学

概要：石造物は重要な歴史資料であり、かつ誰でも触れることのできる身近な文化財である。その歴史遺産としての重要性を再発見することで、地域資源としての価値づけを模索する。

■石造物とは

石造物とは文字通り石でできた造形物のことである。広い意味では旧石器時代の石器類や縄文時代の岩偶なども石造物となるが、一般的には飛鳥時代以降の石製造形物を石造物と呼んで、研究対象としている。この石造物は日本中あらゆるところに存在している。辻の祠にあるお地藏さん、墓地に転がる古い墓石、お寺の石塔、神社の狛犬、あらゆるものが歴史研究の対象となり得る文化財であり、歴史遺産である。

■石造物研究と地域史

石造物は身近にあり、またどこにでもあることから、その価値が顧みられることが少なく、ひどい場合には墓地整理とともに廃棄されたりしてしまう。しかしその地域資源としての価値は大きい。

写真は長浜市西浅井黒山石仏群である。ここには鎌倉時代の見事な石造物のほかに、大量の小型石仏・板碑がある。いずれも室町時代から戦国時代のものであるが、これらの中には近江で見かけない暗赤褐色の安山岩が見られる。これらの石材は遠く敦賀の海岸で産出し、陸路運ばれてきた石材であり、モータリゼーションによって失われた日本海から京都に抜ける湖上交通のありし日の姿を語っている。

■石造物研究の可能性

筆者はこうした石造物を詳細に研究することで地域の歴史を復原することを目指している。同時に、歴史を街づくりに生かす際に、石造物も重要な構成資産となりうると考え、その活用を模索している。古文書や考古資料は雄弁だが、資料館などに行かないとみることができない。石造物は街並みの中に溶け込んで、「いつもそこにいる」のである。その地域資源としての価値を見直すべく研究を続けている。



長浜市西浅井黒山石仏群



黒山石仏群の板碑 (左) と敦賀の板碑 (右)



石造物調査風景
(和歌山県高野山)



黒山石仏群の鎌倉時代石造物

視覚伝達デザイン、グラフィックデザイン、 エディトリアルデザイン、イラストレーション

関連するSDGsの国際目標



人間学部 生活デザイン学科 講師 徐 慧

研究分野：Visual Communication Design, Illustration,
Graphic Design, Editorial Design

研究室HP：seohye.com

- ① BI/CI、各種グラフィックデザイン、エディトリアルデザイン、イラストレーション、ウェブデザインをします。
- ② ブランドの維持・管理のため、デザインマネジメント、広告広報戦略、SNS戦略、プロモーション戦略を提案します。



■地域連携活動で商品化になったバッグ

高島市内の高麻株式会社からヨシを原材料とした生地を活用した製品の開発を行い、試作品制作、製品デザインのアイデアを提案



■滋賀県彦根市「彦根の未来を創るアイデアコンテスト」のイラストレーション制作



■環琵琶湖文化論実習報告書のデザイン

日常生活場面でのコミュニケーションと身体動作

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 人間関係学科 教授 高梨 克也

研究分野 : コミュニケーション科学, 身体動作学

概要：人々の日常生活の中での会話や身体動作をビデオに収録して微細に分析し、そこに現れた社会的な価値観や心理学的なメカニズムを炙り出していくことを専門にしています。手法はフィールドワークが中心で、実社会のさまざまな話し合いの現場や伝統的コミュニティの活動の場などに出かけて行って、リアルなコミュニケーションや自然な身体動作の実態を捉えることを心がけています。こうした観察からボトムアップに得られた知見をいかに現場での実践に再還元していくかということにも興味を持っています。

■立場の異なる者同士のコミュニケーションの分析と支援

SDGsに関わるさまざまな現代的課題は、特定の分野や職種、地域、年齢などの立場・属性の人たちだけで解決できるものではありません。そのため、立場の異なる人々との協働が必要になります。こうした協働の核となるのは「コミュニケーション」です。そこで、チーム医療や企業のプロジェクトチームなどに見られる「多職種連携」の中での話し合いや、科学コミュニケーションやコンサルテーションのような専門家と非専門家間のコミュニケーションを対象として、コミュニケーションの実態を詳細に分析していきます。そうした際には、記憶やイメージ、直感のみに頼るのではなく、これらの場面を実際にビデオデータとして収録し、繰り返し視聴しながら、発言の正確な内容やその時の参加者の視線の方向・しぐさなどを正確に特定していくことを通じて、人々の「参加の仕方」のパターンにどのようなフィールド固有の特徴や工夫、課題があるかを具体的に明らかにしていくことが重要です。さらに、各対象フィールドの関係者との協働により、こうした分析成果を現場の当事者にフィードバックしていくことも可能になります。



展示制作



病院カンファレンス



コンサルタント



サイエンスカフェ

多職種連携

専門家と非専門家

■日常生活環境における身体や道具の使い方のマイクロ分析

人々の協働において、コミュニケーションはその中核を担っています。しかし、もちろん、私たちの日常生活環境はコミュニケーションだけで成り立っているわけではありません。オフィスならばパソコンなどの情報機器や事務用品、家庭での食事場面ならば食卓や食器、さらにはテレビや新聞など、われわれは身体動作を介して、多くの物や道具と関わりながら活動を成り立たせています。こうした「物との関わり」も私たちの日常生活の快適さを左右する重要な一側面です。そこで、人々が日常的な生活環境の中で、それぞれの活動に必要な対象物をどのような動作方法によって扱っているかや、その使い方によってどのような工夫や課題が見られるかを、ビデオデータの微視的分析を通じて明らかにしていきます。こうした分析で得られた知見は人工物のデザインなどのさまざまな分野にも応用可能なものであると期待できます。



科学展示



伝統行事



遠隔医療



子育て

身体と物との関わり

滋賀県における在日朝鮮人史



人間文化学部 国際コミュニケーション学科
准教授 河 かおる
研究分野：朝鮮近代史、在日朝鮮人史

概要：滋賀県の在日朝鮮人の歴史を調査研究しています。自治体史編纂における当該地域の在日朝鮮人の歴史の執筆や、地方自治体や学校が保有する文書資料の調査研究等の機会がありましたら、ぜひお声がけ下さい。

滋賀県は、同じ関西の大阪、兵庫、京都に比べれば、朝鮮人多住地域は形成されたり、大規模な炭鉱や軍事関連施設の工事に動員されたりした事例が少ないので、それほど注目されて来ず、他地域に比べて調査研究もあまりなされていませんが、滋賀県でも各地に朝鮮人の足跡が刻まれています。

そうした足跡は、滋賀県に限らず、自治体史等には記録されないことが多いです。以前『東近江市史 能登川の歴史』の執筆に関わらせていただいた際、自治体や学校が保有する資料の中に、在日朝鮮人に関する資料が多数あることを目の当たりにしました。そうした資料を発掘し、多様な地域の歴史を明らかにしていきたいと考えています。



日室鉱業(株)土倉鉱業所跡 (長浜市)

朝鮮人の就労が確認できる主な事業所等(滋賀県)

【凡例】

- 2001年10月の8市41町1村の段階の白地図を利用し、【 】内にもその段階の市町村名を示した。
- 資料で強制連行や徴兵等が確認される事業所等に●印を付けた。
- 証言等で戦時期に朝鮮人労働者がいたことがわかっている事業所等に◎印を付けた(動員形態は不明)。



触れるケアの定量化、手技教育支援システムの開発 および腰痛のある看護職者の就業支援



人間看護学部 人間看護学科 講師 関 恵子

研究分野：基礎看護技術、医療福祉工学

研究室HP：<http://http://www.nurse.usp.ac.jp/kiso/>

- ①触れるケア“マッサージ教育”として、大学の基礎看護技術学やホリスティックケア論でマッサージ教育を行っています。そして、地域の住民の方々や病院で活動を行う、看護ボランティア“未来看護塾”で看護学生が実施するハンドマッサージの実技指導を担当しています。
- ②看護学生および視覚障害のあるあん摩マッサージ指圧師養成学校の学生や有資格者を対象とした手技教育支援システムを工学部と医療教育システム開発企業と共同制作を行っています。
- ③看護師の腰痛者経験者は非常に多く、腰痛により仕事だけでなく私生活にも影響を及ぼします。看護職者が、仕事でも私生活でもいきいきと過ごせる体づくりを行うための研究を彦根市内の病院の協力を受け、腰痛緩和ケアに関する就業支援に向けた介入研究を実施しています。

■看護教育におけるマッサージ手技学習システムの開発

あん摩マッサージ指圧師の資格を生かし、看護教育・地域健康支援で看護マッサージを行っています。マッサージは、受ける側の心地よさだけでなく、心身への効果を見える化し、マッサージの心地よさを定量化することが安全で安楽な看護実践を行う上で重要です。そのため、学習システム開発を本学の工学部機械システム科の西岡講師と行っています。

■腰痛のある看護職者の就業支援に関する研究

看護師の看護援助を行う上で、腰に負担のある患者の持ち上げ動作をなくす取り組みは積極的に行われています。しかし、寝たきり患者さんの看護の場合、清拭や排泄、食事の援助で中腰姿勢といった腰痛の原因となる動作が多く存在します。

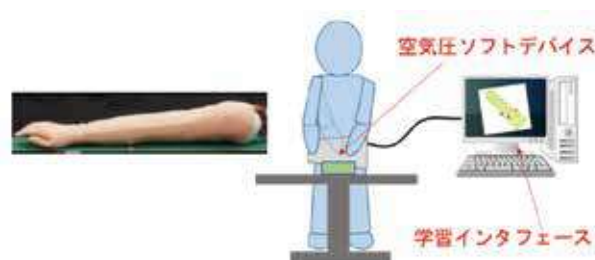
研究では、腰痛原因動作による腰の負担“筋肉の疲労”を改善するための血行促進作用のあるマッサージによる就業支援研究を実施しています。



■視覚障害者を対象とした手技教育支援システムの開発

視覚障害のある人々の主要な職業としてあん摩マッサージ指圧師業があります。しかし、所得は同じ資格を持つ晴眼者の半分以下であり、職業的地位も低いことが問題となっています。

その原因として、視覚データが得られない状況での手技習得の難しさが挙げられます。現在、手技教育支援システムを、本学の工学部機械システム科の西岡講師と共同開発しています。この開発では、県内の視覚障害者センター、県立盲学校、医療教育システム開発企業と連携し取り組んでいます。



看護従事者育成に関する研究

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 講師 千田 美紀子

研究分野 : 基礎看護学 看護教育

近年、高齢社会になっていく社会の中で医療に対する安全・安心の意識は高まっており、質の高い医療ケアの提供が求められています。ケアを受ける中でも、その人らしい生活が送れるように支援することが看護職者に求められており、看護学教育にとって重要になると考えます。その実践能力が育つように、看護技術に関する教育方法の検討や、学生一人一人の個性に沿った支援に関する研究を行っています。

■看護ケアの技術習得するための教育方法の検討

看護学教育の中で、看護ケアの技術習得は必要不可欠なものです。看護ケア技術には、食べる、寝る、動く、息をする、身なりを整える、身体を清潔に保つなど、生きていくために必要な動作の援助があります。それらの技術が実践できるようになるには、知識・技術・態度を身につける必要があります。現在の教育では、まず技術に必要な知識を「講義」で学び、技術・態度は、学校内で学生同士で実践し合う「演習」を行い、「実習」を通して病院などの現場で実践することで習得しています。



その教育の中でも「演習」に着目し、技術を習得するためにはどのようなことが影響するのか、効果的に学ぶための方法を検討しています。また、技術教育の中で腰痛予防に関する検証も行っています。

■発達障害の特性をもつ学生への支援

近年、「発達障害」という言葉を耳にすることが増えたと思います。発達障害とは、生まれつき脳の発達がアンバランスであり、ある特定分野の勉学が苦手、コミュニケーションが苦手、こだわりが強い、落ち着きがない、集中力が続かないなど、様々な特徴により日々の生活に困難を抱えている状態のことを指します。現在はそのような人が増加傾向にあり、学びやすい学習環境や働きやすい労働環境を作ることが求められています。その中でも特に看護では相手の気持ちに寄り添うことが大切であり、職業選択をする上でコミュニケーション能力が必要とされます。コミュニケーション技術も学習により、身につけていくことが可能であるため、この特性個々に沿った支援を行うことで、困難が少しでも軽減できるような研究を行っています。

<研究ノート>

- ・「看護教育における病院実習に関する研究の動向分析と今後の課題」千田美紀子, 米田照美, 清水房枝, 伊丹君和 (人間看護学研究 (11)45 ~ 52 2013年03月) 共著 共同 (主担当)

子どもの気持ちに寄り添う

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 教授 古株 ひろみ

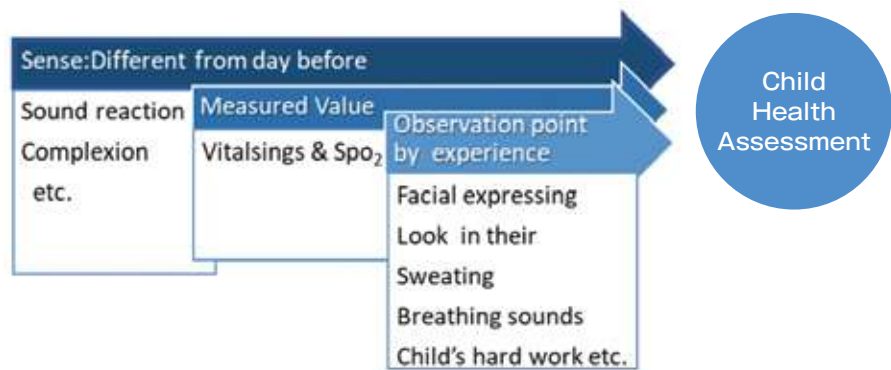
研究分野 : 小児看護、家族看護

子どもは、ことばでは十分に自分の気持ちや状況を表現することができません。そのため、子どもの気持ちや体調に寄り沿った支援が必要と考えています。

■子どもの健康評価の共有化に関する研究

医療者の健康評価に至るプロセスについては経験や体験から感じとるいつもの違いがまず最初に察知されます。その後、客観的な数値で確認し、体調を維持するための対応が行われます。

誰もが共有できる健康評価指標の開発にむけて、経験や体験から感じ取る視点などについて体系的に可視化することを研究しています。



The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars

■処置や入院などで生ずる子どもの心理的不安の軽減にむけた支援への研究

処置や入院などで生ずる子どもの心理的不安の軽減のための支援について研究しています。また、その内容を小児看護教育においても教授し、実践に臨めるよう検討しています。

<発表>

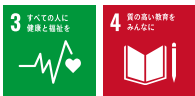
・ Awareness of Clinical Instructors Regarding Advocating for Children's Rights in Pediatric Nursing Training

(The 24th East Asian Forum of Nursing Scholars 2021年04月)

Rumi Ueno, Hiroko Kokabu, Chiyuki Ryugo, Tomoko Kawabata, Miki Hirata, Misa Suzuki, Ayumi Tamagawa

ホリスティックケアにおける音楽療法と看護の協働

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 教授 横井 和美

研究分野 : 臨床看護学

概要：慢性の病いをもつ方は、病気からくる身体的な問題だけでなく、病気からくる不安などの心理的な問題、社会参加や人間関係など様々な問題をかかえて生きていきます。

このような慢性の病いをもって生活されている方に、代替療法の一つである音楽療法を看護援助と組み入れて提供できるケアの方法を探究しています。

現在、滋賀県内で活動できる音楽療法士の方と身体障がい児者や要介護高齢者などを対象にケアの場に音楽療法を組み入れる活動を行っています。

そして、長期にわたり持続する病いと共に生きる人とその家族が、病気と折り合いをつけて、その人らしい生活を送ることを目指しています。

■ホリスティックケアにおける音楽療法と看護の協働のあり方

日本音楽療法学会認定の音楽療法士の方と共にNPO法人音楽療法の会さざなみを結成し、滋賀県内での音楽療法の普及活動に努めています。

身体障害者通所施設や高齢者のディサービスで実施したり、介護予防のための健康教育として市町村と共同して音楽療法の体験教室を実施しホリスティックケアとしての看護介入の視点を探っています。



■慢性病者のセルフマネジメント支援

人間看護学研究科 高度実践看護学部門の慢性疾患看護分野で慢性疾患看護専門看護師の育成にかかわっています。糖尿病や慢性心不全、慢性呼吸器疾患など慢性疾患を有した方がその人らしく生活していけるセルフマネジメント支援についても追究しています。

地域在住高齢者の肺炎予防



人間看護学部 人間看護学科 准教授 岡本 紀子

研究分野 : 高齢看護学、地域看護学

概要：肺炎は我が国の死因の第5位、誤嚥性肺炎は第7位で、合わせると第3位の多さとなります。そして、肺炎に罹患する方の多くは高齢者です。

加齢とともに免疫機能や嚥下機能が低下し、肺炎に罹患しやすく治癒しにくくなります。しかし、日常生活に目を向けると、社会的な交流を図ることでよく眠れたり、夜間の睡眠の質を高めることで免疫機能への効果も期待されています。

そこで、食べる、眠る、活動する（身体を動かしたり人と関わったりする）といった日常の営みの中から、高齢者にとって無理のない肺炎予防のためのセルフケアを提案したいと考えています。

■加齢と睡眠の質

加齢に伴い睡眠の質は低下します。具体的には、寝付くまでに時間がかかる、途中で目が覚める、朝早く目が覚める、ぐっすり眠った感じがしない、といったことが生じます。

そこで、高齢者の方に右の図のように手首に機器を装着してもらい睡眠時間や活動量、照度などを測定して結果をフィードバックしています。



WGT 3 X-BT (アクチグラフ社製,米国)

■日常の肺炎予防策

肺炎を予防するために、手洗いやマスクの装着等が推奨されています。

そこで、これらの実施状況を明らかにするために、高齢者の方に日頃実施している方法で手を洗ってもらい、手を洗う前と後の掌の細菌を採取すると、手洗いの後に細菌数が増加していることもあります。また、実際の手洗いに要する時間は人によって異なります。これらの結果を提示すると、手洗いに要する時間は長くなりましたが、手洗い後の細菌数は減少しませんでした。

マスクの着脱では、マスクが顔に密着するように装着したり、マスクを外す際に手の汚染を防いだりすることが重要ですが、意識されないことがあります。そのため、正しい手洗いやマスクの着脱方法を紹介して、一緒に実施する等しています。

このように研究活動を通して、高齢者の方の生活リズムを整え、肺炎や感染症を予防するための行動を効果的に行えるように取り組んでいます。

脳卒中サバイバーのセルフマネジメントプログラム開発

関連するSDGsの国際目標



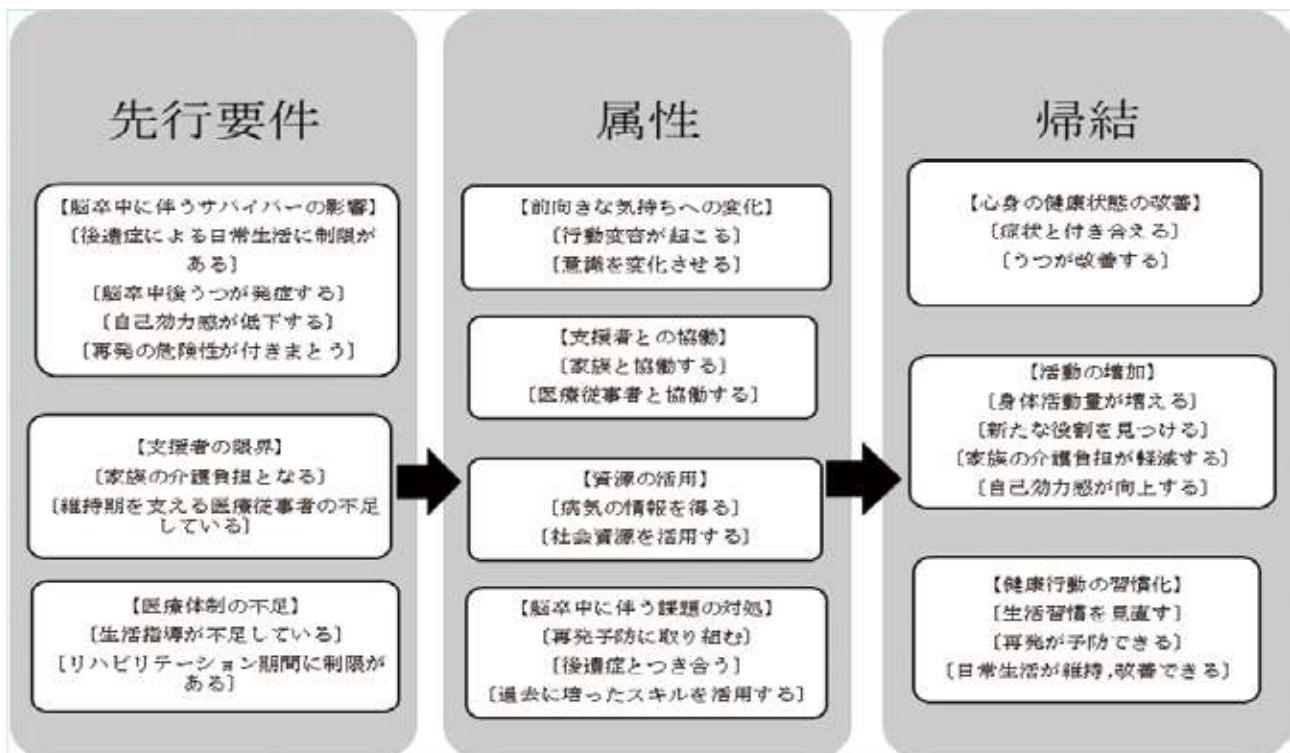
人間看護学部 人間看護学科 講師 片山 将宏

研究分野 : 成人看護学 脳卒中看護 外来看護

脳卒中は、わが国では死亡原因の第4位を占めます。また、介護が必要となる最大の原因でもあります。脳卒中サバイバーとは、①高血圧症、糖尿病などの生活習慣病をもっており、脳卒中再発の危険が一生付きまとう、②運動麻痺や失語などの後遺症があり、日常生活に支障をきたす、③支援する医療従事者がほとんどいない、という特徴をもちます。脳卒中サバイバーは、このような特徴から、これまでに大切にしてきた生活や人生を縮小させながら生きていかなければならない状況に追い詰められます。そこで、脳卒中サバイバーが健康でその人らしく生きること、well-beingを目指すことを目的とした「オンラインで行う脳卒中サバイバーのセルフマネジメントプログラムの開発」に取り組んでいます。

■脳卒中サバイバーのセルフマネジメントの概念分析

脳卒中サバイバーは、他の慢性疾患とは違うセルフマネジメントの特徴をもちます。そこで、概念分析を行った結果、脳卒中サバイバーのセルフマネジメントを「脳卒中サバイバーが前向きな気持ちに変化できるように支援者と協働しながら資源を活用し、脳卒中に伴う課題に対処すること」と定義しました。この概念図を基にセルフマネジメントプログラム開発を行いました。今後は、脳卒中サバイバーを対象にプログラムによって得られる効果を明らかにしていきます。



脳卒中サバイバーのセルフマネジメントの概念図

フレイル状態にある高齢者への意思決定支援

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 講師 松井 宏樹
研究分野 : 老年看護学

概要：フレイルとは、要介護状態に至る前段階として位置づけられ、多面的な問題を抱えやすく、健康障害を招きやすい状態とされています。その一方で、フレイルには、適切な介入により再び健康な状態に戻るといった可逆性も示唆されています。つまり、フレイル状態にある高齢者は、健康な状態と要介護状態との狭間の時期にあると言えます。そのため、フレイル状態にある高齢者が自分自身の人生をどのように生きたいか支援していくことは、高齢者の生活の質を高めることにつながると考えています。

■フレイル状態にある高齢者への意思決定支援の質向上に向けた調査（文献研究）

文献調査の結果より、高齢者がフレイルに該当した場合や体重減少、筋力低下等の身体的変化を本人が自覚した際には、本人の意向を確認し始めるきっかけになると考えられました。一方、フレイル状態にある高齢者への意思決定支援の内容やそのプロセスについては、さらなる調査が必要であると考えています。

■フレイルという言葉の認知度

フレイルという概念が世間に浸透しているとは言い難く、フレイルと告げられた高齢者であっても、そのリスクや今後の生活への影響を想像することは難しいのではないかと考えています。今後、フレイルという言葉の認知度を高めるための活動や教材の開発等を目指しています。

<論文>

「意向確認の開始時期およびその内容に関する文献検討—フレイル状態にある高齢者への意思決定支援の質向上に向けて—」松井宏樹（滋賀県立大学人間看護学部 人間看護学研究（19） 11～17 2021年03月）

地域包括ケアの時代における地域・在宅看護の専門性

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 教授 新井 香奈子

研究分野 : 地域・在宅看護学 老年看護学

地域共生社会の実現を見据え、現在わが国では全世代を対象とした地域包括ケアシステムの構築が急がれています。多様な病気や障害を持ちながら地域で暮らす療養者・家族の支援や支援体制、および看護職の専門性の確立に貢献したいと考えています。

■難病支援終了事例検討会(デスカンファレンス)を土台にしたALS患者支援体制の構築

ALS療養者への難病保健活動(健康福祉事務所)を実施する中で見えてきた課題の解決に向け、平成29(2017)年から健康福祉事務所を実施主体としたデスカンファレンスに助言者として参加しています。事例の全経過を多職種間でポジティブシンキング思考で振り返り、次の支援に生かすことを積み重ねることは、支援者の資質向上や連携強化につながりました。また、このカンファレンスを土台に地域課題および地域の強み抽出に向けた検討を実施し、ALS患者支援体制(レスパイト入院先の確保、在宅での看取りなど)の構築を図っています。

■医療的ケア児の地域支援体制の構築

医療的ケア児の支援者として関わる県と市の保健師が共同で実施した、1)医療的ケア児ニーズ調査、2)医療的ケア児地域資源把握調査に助言者として参加しています。令和2年には、その結果報告の場(保健・医療・福祉・教育・行政他)において、各機関の課題と今後の取り組みについての共有・確認を行いました。この会議の場は、顔の見える関係づくりとA市の医療的ケア児の地域支援体制構築の第一歩につながりました。

■がん患者・家族の意思決定を支える在宅の場の認定看護師による看護相談室の開設

B市内の複数の訪問看護ステーション所属の認定看護師とがん患者・家族に対する看護相談室を地域に開設し、個別相談とグループ相談(サロン)を定期的に行いました。参加者の許可のもと相談内容の分析を行いました。相談に来られた方は、診断後間もない、治療中、治療終了後の訪問看護利用経験のない患者本人や家族でした。この相談室では、相談者が利害関係なく、治療や身体状況、医療者との関係、家族関係など様々な苦悩を認定看護師に安心して話すことのできる場となりました。この話すという行為は、自らの思いの整理と自己決断していくことにつながり、また過去の体験(苦悩)に対するグリーフケアの場ともなりました。認定看護師の看護専門職としての機能の充実につながりました。

■高齢者へのフットケアによる介護予防支援

デイケア利用の高齢者に対し週1回のフットケアとセルフケア指導を行い、足指・爪の状態と自覚症状、運動機能、QOLの視点からの分析を行う調査を実施しました。高齢者の多くに皮膚・爪・足のトラブルが生じていましたが、1回20分の看護師によるフットケアにより、皮膚・爪、循環状態の改善がみられました。また、本人だけでなく家族の「足」への興味が高まり、爪切り方法の改善、靴下・靴の選び方や着用の仕方などのセルフケアの向上につながりました。継続的なフットケアを楽しみに、デイケアを休む回数の減少も見られました。このように、一足飛びに運動機能改善には至りませんが、高齢者の自立支援、介護予防支援につながった支援となっています。

■高齢者の口腔機能向上を促す支援の開発や摂食・嚥下障害者の主介護者に向けた支援

地域で生活する一般高齢者を対象に、口腔機能向上のセルフマネジメント力を高めるプログラムの開発やその効果の分析に関わっています。また、摂食・嚥下障害者の主介護者への訪問看護師による支援についての検討も行い、多職種協働による支援体制の確立や訪問看護師の専門性の確立を図っています。

がん患者への意思決定支援

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 助手 國丸 周平
研究分野 : 成人看護学

がんに対する医療技術と治療法の発展により、がん患者の生存率は上昇を続け、患者ががんと共に生活を営む期間も長くなっています。治療方針から療養方法、生き方に至るまで多くの選択を求められるがん患者が、意思決定をすることができる支援について研究しています。

■肺がん患者が治療を緩和ケア中心に変更することを決めるまでの関わり

治癒を目指す治療から緩和ケア中心の医療へと転換する時期にあるがん患者は「生きたい」という希望を持ちながら、治療に対する諦めや死を意識しており、精神的に不安定な状態にあると言われています。そのような状況下でも、がん患者は人生の最終段階の過ごし方に関する意思決定を行わなければなりません。このような時期における意思決定支援の在り方について、早期発見・治療が難しいとされている肺がん患者と看護師との関わりに焦点を当てて研究を進めています。

■がんの5年相対生存率

右図は主要部位別に示したがんの5年相対生存率です。多くの部位で上昇傾向にあります。生活をがんと共にする期間が長くなる分、治療や生活に対するサポートが必要になります。

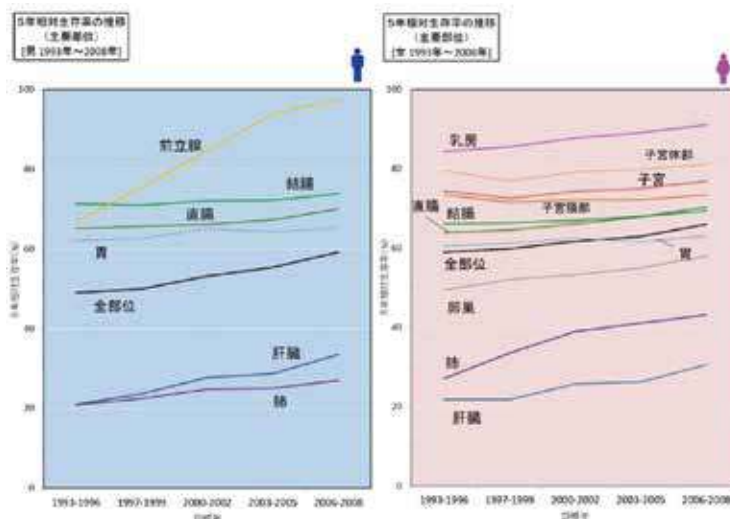


図. 主要部位別、男女別に見たがんの5年相対生存率
国立がん研究センター がん情報サービス
(https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/annual.html) より転載

■アドバンスケアプランニングからみる意思決定支援の在り方

自分がどのように生きていか、最期をどのように過ごしたいかを考えることは病気や障害の有無、年齢にかかわらず全ての人に必要であると言われています。その方が人生を考えることができるよう、話し合い（意思決定支援）を早期から繰り返し行うプロセスをアドバンスケアプランニング（人生会議）といいます。

話し合いが繰り返し行われることで自分自身の人生観を見つめ直すだけでなく、病気や障害により意思表示が出来なくなった後も、希望を理解した家族や医療者がその人に代わって意思決定を行うことができます。これは、がん患者に対しても同様で、がんと診断されたとき、治癒を目指して治療に取り組むとき、治癒が難しいと判断されたとき等、各時期における意思決定支援の在り方を検討する必要があると考えています。

2010年代以降の自伝的アメリカ文学作品における 対テロ戦争と身体性の文化史的研究

関連するSDGsの国際目標



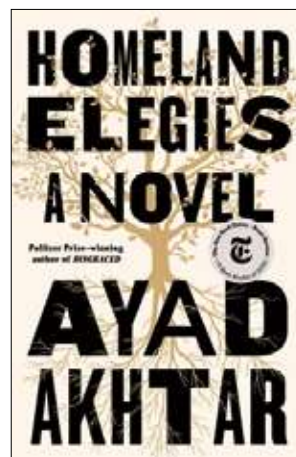
全学共通教育推進機構 講師 近藤 佑樹

研究分野：現代アメリカ文学・文化

概要：遠くない過去に始まった対テロ戦争を自伝的な作品の中に組み込んだ21世紀のアメリカ人作家による小説を、「戦争」と「身体性」という観点から読み解くことで、近年のアメリカ文学における「対テロ戦争」のイメージの変化を検証するものです。

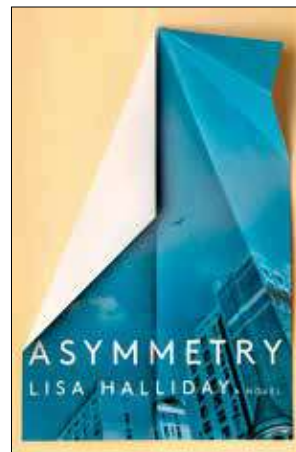
■メタファーとしての「戦争」と「身体性」

今までは、フィリップ・ロスという現代アメリカをかつて代表していた作家の後期作品における現代アメリカ社会の諸相を、文字通りないし比喩的な意味における「戦争」と「身体性」という観点から読み解くことを研究テーマとしていました。この文脈における「戦争」は、第二次世界大戦のような総力戦に誘発され、アメリカ国内で起こる暴動や、一見平和な町を突如襲う感染症など、現実の戦争とリンクして比喩的に展開する事象を含みますし、「身体性」も単に物理的に体現される人間の体を巡るものというよりも、いかに人間の身体が感染や戦傷によって損なわれ、社会的な烙印を伴っていくのか検証するための概念でした。



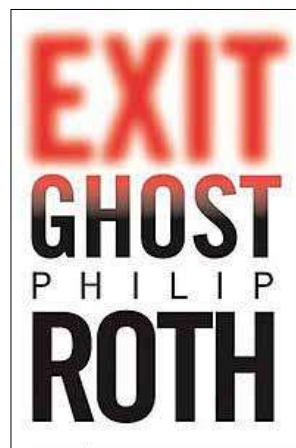
■「対テロ戦争」のイメージの変容

そういった研究の中、9.11同時多発テロの後に始まった「対テロ戦争」、あるいは時折濫用される「テロリズム」に対するイメージが、ロスが作品を書いていた2000年代初頭のアメリカと、2020年代のアメリカとでは確実に変わりつつあるのではないかと、ということについて考えるようになりました。そこで、フィリップ・ロスに影響を受けた後続の作家たちはまた彼とは異なった形で「対テロ戦争」を描こうとしているのではないかと、だとすればその描き方はどう変わってきているのか、というテーマを設定しました。その上で、「戦争」や「身体性」という概念を用いて、作品の背後にある「対テロ戦争」を巡る複数のレイヤーを明らかにしていくことを目的としています。



■文学と現実のはざままで

文学研究だけで、画期的な病気の治療法が発見できるわけでもありませんし、また地球環境の抜本的な改善にも直結しません。しかしながら、文学作品（もちろん文学に限定されることではありませんが）とは、常にそういった作品を生み出す土壌としての社会を映し出す鏡であると同時に、その社会に影響を与え、その形を変容させてしまう存在であると言えるでしょう。その点からすれば、文学作品が作り出す複雑に入り組んだ世界に体系的な言語を与えることにある種の意義はあるはずです。そのような問題意識の下、私は現代アメリカ文学の研究を続けています。



【滋賀県立大学 研究者一覧】

研究者別 研究分野・キーワード一覧

学部学科等	職名	氏名	研究分野・キーワード	
環境科学部	環境生態学科	教授	西田 隆義	生態学
		教授	小泉 尚嗣	地震地下水学 地震, 地下水, 地殻変動
		教授	伴 修平	水圏生態学、プランクトン生態学
		教授	丸尾 雅啓	水圏化学、分析化学
		教授	浦部 美佐子	陸水生物学, 生態, 底生動物, 寄生虫, 分類
		准教授	野間 直彦	植物生態学
		准教授	後藤 直成	陸水学, 環境科学, 生物地球化学, 物質循環
		准教授	吉山 浩平	理論生態学
		准教授	堂満 華子	古環境学, 微古生物学 (浮遊性有孔虫)
		准教授	細井 祥子	環境微生物学、分子微生物学
		講師	籠谷 泰行	森林生態学
		講師	肥田 嘉文	環境科学、影響評価科学
		講師	尾坂 兼一	森林水文学 生物地球化学
		講師	工藤 慎治	大気科学, 大気汚染物質, 環境動態, 発生源解析
	環境政策・計画学科	教授	金谷 健	廃棄物管理論
		教授	井手 慎司	水環境管理
		教授	上河原 献二	環境法、環境政策、地球環境条約制度、自然保護制度、外来生物管理制度
		教授	高橋 卓也	環境経営, 森林政策・計画
		教授	香川 雄一	環境地理学、都市社会地理学、政治地理学
		准教授	瀧 健太郎	流域政策・計画、EcoDRR、グリーンインフラ、防災・減災
		准教授	林 宰司	環境経済学, 環境政策
		准教授	村上 一真	環境経済学, 開発経済学, 環境政策論, 地域経済・政策論
		准教授	和田 有朗	環境政策, 環境計画, 環境システム, 地域システム
		講師	平岡 俊一	持続可能な地域づくり、市民参加・協働、NPO、環境社会学
		講師	平山 奈央子	湖沼流域ガバナンス、水資源管理、住民参加
		講師	白木 裕斗	エネルギーシステム学, 環境システム学
		環境建築デザイン学科	教授	陶器 浩一
	教授		村上 修一	ランドスケープデザイン、景観計画
	教授		高田 豊文	建築構造学 応用力学 木質構造 地震防災
	教授		白井 宏昌	建築史、建築設計理論
	教授		芦澤 竜一	環境建築学
	准教授		金子 尚志	都市・環境建築設計、パッシブデザイン、サステナブルデザイン
	准教授		ヒメネス ヘル デホ ホアン ラモン	建築史・意匠 都市計画・建築計画
	准教授		轟 慎一	都市計画、地域計画、都市政策、地域環境デザイン、景観論、集落論、生活空間論
	准教授		山崎 泰寛	近代建築史、建築メディア論、展覧会
	准教授		川井 操	都市史、建築計画
	講師		迫田 正美	建築歴史・意匠、建築空間論
	講師		高屋 麻里子	日本建築史、都市史
	講師		鄭 新源	建築環境工学、建築環境設備、環境性能評価、環境心理
	講師		永井 拓生	建築構造、構造力学、数値解析、自然素材、建築保存・再生
	生物資源管理学科	教授	大久保 卓也	環境工学、水質工学、生態工学、水文学
		教授	須戸 幹	環境化学
教授		杉浦 省三	魚類栄養学、養魚飼料学、水産増養殖	
教授		泉 泰弘	作物学、栽培学	
教授		原田 英美子	植物科学、重金属、水生植物、琵琶湖、伊吹山	
教授		入江 俊一	応用微生物、分子生物、バイオマス変換、リグニン、木質バイオマス	
准教授		岩間 憲治	土壌物理学、灌漑排水学、GIS (地理情報システム)	
准教授		上町 達也	園芸学	
准教授		高倉 耕一	個体群生態学、行動生態学	
准教授		清水 顕史	植物遺伝育種学	
准教授		増田 清敬	LCA、環境経済学、農業経済学	
准教授		皆川 明子	水田生態工学、農業水利	
講師		飯村 康夫	土壌学	
講師		畑 直樹	蔬菜園芸学、植物工場	
講師		泉津 弘佑	植物病理学	
講師	中川 敏法	家畜飼養 (反芻家畜・家禽)、未利用資源、飼料分析、畜産物の機能性評価		
講師	住田 卓也	植物病理学		
講師	加藤 恵里	獣害対策、農村ホスピタリティ、農山村、コミュニティ、自然、地域資源、地域振興、野生動物管理		

学部学科等	職名	氏名	研究分野・キーワード	
工学部	材料科学科	教授	バラチャンドラン ジャヤデワン	金属材料、材料科学、ナノ材料化学
		教授	松岡 純	ガラス科学、熱物性、力学特性、無機材料
		教授	奥 健夫	エネルギー環境材料、光、量子情報、エネルギー、太陽電池
		准教授	宮村 弘	金属材料学、金属間化合物、表面処理
		准教授	秋山 毅	エネルギー環境材料
		准教授	山田 明寛	無機材料
		講師	鈴木 厚志	エネルギー環境材料 太陽電池 量子コンピューター
		講師	鈴木 一正	有機-無機複合材料、蛍光材料、溶液プロセス
		教授	徳満 勝久	有機複合材料、高分子物性
		教授	金岡 鐘局	高分子精密合成、高分子機能
		教授	北村 千寿	有機環境材料、有機化学
		准教授	竹下 宏樹	高分子構造、高分子物性
		准教授	谷本 智史	高分子機能設計、ブロックポリマー、相分離、ミセル、ペプチド、吸着、表面、界面、微粒子、バイオミネラリゼーション、キチン・キトサン、貴金属イオン
		准教授	加藤 真一郎	構造有機化学、超分子化学、物理有機化学
		講師	竹原 宗範	生体機能材料、応用微生物学、遺伝子工学、生物工学、有機環境材料
	講師	伊田 翔平	高分子合成、精密合成、リビング重合、高分子ゲル	
	機械システム 工学科	教授	安田 寿彦	福祉ロボット、メカトロニクス、非線形システム
		教授	山根 浩二	内燃機関、バイオディーゼル、燃焼、ディーゼル噴霧、油化学
		教授	南川 久人	流体工学、混相流工学、気泡工学、ファインバブル
		教授	奥村 進	ライフサイクル工学、品質設計、メンテナンス工学
		教授	門脇 光輝	偏微分方程式論、特に数学的散乱理論
		教授	呉 志強	振動工学、計算工学、振動、共振、形状最適化、最適設計、FEM 解析
		教授	田邊 裕貴	材料強度学、破壊力学、表面改質、非破壊検査
		准教授	山野 光裕	ロボット工学、メカトロニクス、機械制御
		准教授	橋本 宣慶	生産加工学、人間工学、人工現実感
		准教授	河崎 澄	エネルギーと動力、燃焼工学、内燃機関
		准教授	安田 孝宏	流体工学
		准教授	大浦 靖典	機械ダイナミクス、振動工学
		准教授	和泉 遊以	材料強度学、破壊力学、表面改質、非破壊検査
		講師	西岡 靖貴	アクチュエーター、ソフトメカニクス、空気圧制御システム
		電子システム 工学科	講師	田中 昂
	教授		柳澤 淳一	デバイス工学、半導体プロセス工学、イオンビーム工学
	教授		岸根 桂路	集積システム、アナログ・デジタル融合集積回路
	准教授		一宮 正義	デバイス工学、光物性、超高速分光
	准教授		土谷 亮	集積回路、アナログ RF 回路、低消費電力技術
	講師		井上 敏之	集積回路、無線通信、光ファイバ無線
	講師		番 貴彦	半導体デバイス、記憶素子、ナノ粒子、2次元材料
	教授		乾 義尚	パワーエレクトロニクス、電力工学、エネルギー変換、燃料電池
	教授		作田 健	センシング工学、磁気計測、磁気センシング応用
	准教授		坂本 眞一	熱音響工学、超音波エレクトロニクス
	講師		平山 智士	電磁流体力学、プラズマ工学
	教授		酒井 道	メタマテリアル科学、プラズマ理工学、複雑ネットワーク科学
	教授		砂山 渡	データマイニング、知能情報工学、教育工学
准教授	宮城 茂幸		デジタル信号処理、画像処理、時系列解析	
ガラス工学 研究センター	講師		榎本 洸一郎	画像工学、システム情報科学、農林水産業、実応用
	准教授	山田 明寛 (兼務)	無機材料	
	講師	出島 一仁 (兼 機械システム工学科)	熱工学、伝熱工学、MEMS	

学部学科等	職名	氏名	研究分野・キーワード
地域文化学科	教授	市川 秀之	日本民俗学
	教授	亀井 若菜	日本美術史
	教授	京樂 真帆子	平安京、都市社会史、女性史
	教授	東 幸代	日本近世史
	教授	佐藤 亜聖	考古学、文化財科学、歴史学
	教授	塚本 礼仁	人文地理学
	教授	石川 慎治	保存修景、建築史
	准教授	萩原 和	景観まちづくり、都市農村における地域計画
	准教授	横田 祥子	社会人類学、宗教人類学、地域研究
	准教授	櫻井 悟史	歴史社会学、文化社会学、犯罪社会学、日本近現代史
	准教授	金 宇大	世界遺産学、アジア考古学
	講師	木村 可奈子	東アジア国際関係史
講師	高木 純一	日本中世史、村落史	
生活デザイン学科	教授	宮本 雅子	住宅照明、色彩、インテリア計画、福祉住環境
	教授	印南 比呂志	地域デザイン、道具デザイン、伝統産業、ブランディング、地場産業論、伝統工芸、職人研究
	教授	森下 あおい	服飾デザイン、家政・生活学一般
	教授	藤木 庸介	建築計画、伝統的居住文化の維持・保全、都市計画、家政・生活学一般、自律的観光
	准教授	横田 尚美	服飾文化史、西洋服装史、日本洋装史
	准教授	山田 歩	行動経済学、ナッジ、消費者心理学、マーケティング
	講師	佐々木 一泰	空間デザイン、建築デザイン、構法研究、建築史・意匠、家政・生活学一般
	講師	南 政宏	プロダクトデザイン、ブランディングデザイン、デザインディレクション、家政・生活学一般
生活栄養学科	講師	徐 慧	視覚伝達デザイン、グラフィックデザイン、イラストレーション
	教授	矢野 仁康	病態栄養学、分子細胞生物学
	教授	中井 直也	運動栄養学
	教授	辰巳 佐和子	臨床栄養学、腎臓内科学、骨代謝学
	教授	福渡 努	栄養神経科学、栄養生理学、食品機能学 食品、栄養、代謝
	准教授	奥村 万寿美	臨床栄養学、栄養食事指導、食育、栄養教育、給食経営管理
	准教授	佐野 光枝	食品学、栄養生化学、分子栄養学、発生生物学、食生活学
	准教授	遠藤 弘史	病態栄養学、分子細胞生物学
	准教授	今井 絵理	公衆栄養学、栄養疫学、応用栄養学、食生活学
	准教授	東田 一彦	運動生理・生化学、スポーツ栄養学
	准教授	桑原 頌治	栄養学、臨床栄養学、腎臓内科学
	講師	畑山 翔	基礎栄養学
講師	田中 大也	病態栄養学、分子細胞生物学	
人間関係学科	教授	高梨 克也	コミュニケーション科学、身体動作学
	教授	松嶋 秀明	臨床心理学
	教授	上野 有理	発達心理学、比較認知科学、霊長類学
	教授	丸山 真央	地域社会学、都市社会学
	准教授	大野 光明	歴史社会学、社会運動論、社会運動史、沖縄、軍事化、「戦後」史
	准教授	木村 裕	教育方法学
	准教授	杉浦 由香里	教育学、教育史
	准教授	原 未来	若者支援、ひきこもり、青年期教育
	講師	中村 好孝	社会学（社会学史、障害者福祉）
	講師	後藤 崇志	社会心理学・教育心理学・認知心理学
国際コミュニケーション学科	教授	棚瀬 慈郎	文化人類学、チベット学、チベット地域研究
	教授	呉 凌非	言語処理・言語学
	教授	ジョン リビー	英語
	教授	ボルジギン ブレンサイン	社会史、現代中国研究、モンゴル研究
	准教授	山本 薫	英文学・英国小説
	准教授	吉村 淳一	ドイツ語学
	准教授	河 かおる	朝鮮近代史
	准教授	マーティン ホークス	留学英語対策講座
	准教授	橋本 周子	思想史、文化史、フランス史
	講師	中谷 博美	認知言語学、語用論、英語教育
講師	カブシク アン トニア	メディア、コミュニケーション学、カルチュラル・スタディーズ	
講師	間 永次郎	社会思想史、南アジア地域研究、ポストコロナ論、宗教学	

学部学科等	職名	氏名	研究分野・キーワード	
人間看護学部	人間看護学科	教授	伊丹 君和	基礎看護技術、教育工学
		教授	越山 雅文	産婦人科学、母性看護・助産、女性の健康・周産期ケア、浮腫診断・治療、子宮頸がんの診断・予防
		教授	本田 可奈子	救急看護、看護教育、看護管理
		教授	安原 治	神経生理学・神経科学一般 神経内科学 神経解剖学・神経病理学 解剖学一般（含組織学・発生学）
		准教授	米田 照美	基礎看護学、看護管理学、医療安全教育、危険認知、視線計測、看護者（看護学生・看護師）
		講師	関 恵子	基礎看護学
		講師	千田 美紀子	基礎看護学
		教授	岩谷 久美子	生涯発達看護学、母性看護学、助産学、助産管理、安全管理
		教授	古株 ひろみ	臨床看護学、小児看護、家族看護
		准教授	板谷 裕美	母性看護学、助産学、母乳育児支援、助産師のキャリア発達、女性の健康、月経カップ
		准教授	川端 智子	小児看護、子どもと喫煙、未成年の喫煙防止教育、NICU
		准教授	古川 洋子	地域看護学、母性看護学、助産学、いのちの教育、産み育て支援、社会的養護
		講師	玉川 あゆみ	地域看護学、小児看護学、発達障害児の外来受診、家族支援
		講師	藤平 麻理子	生涯発達看護学、母性看護学、助産学、シミュレーション教育、医療安全教育
		講師	渡邊 友美子	母性看護学、助産学
		助手	濱野 裕華	母性看護学、助産学
		教授	糸島 陽子	エンドオブライフケア、死生観、医療倫理、シミュレーション教育
		教授	横井 和美	臨床看護学、成人看護学、慢性期看護、看護教育
		准教授	荒川 千登世	臨床看護学、成人看護学、急性期ケア、回復期ケア、看護教育
		准教授	岡本 紀子	老年看護学、感染予防
		講師	生田 宴里	臨床看護学、クリティカルケア看護、成人看護学
		講師	岡崎 瑞生	看護学、老年看護学、生活の質
		講師	小野 あゆみ	成人看護学、慢性期ケア、肝疾患患者の看護
		講師	片山 将宏	成人看護学、慢性疾患看護、脳血管障害、外来看護
		講師	喜多下 真里	成人看護学、がん看護、緩和ケア
		講師	中川 美和	成人看護学、慢性期ケア、糖尿病患者の看護
		講師	松井 宏樹	老年看護学
		教授	甘佐 京子	生涯発達看護学、精神看護学、家族看護学、学校精神保健、家族支援、早期介入
		教授	新井 香奈子	在宅看護学
		准教授	小林 孝子	公衆衛生看護学
		准教授	馬場 文	公衆衛生看護学、児童虐待防止対策
		准教授	牧野 耕次	生涯発達看護学、精神看護学、かかわり、巻き込まれ、involvement
		准教授	森本 安紀	在宅看護学、民俗学
		講師	川口 恭子	公衆衛生看護学、保健師活動、ひきこもり、家族支援
講師	下通 友美	精神看護学		
講師	横山 詞果	在宅看護学、高齢者ケア、国際看護		
助手	國丸 修平	成人看護学		
全学共通教育推進機構	准教授	坂本 輝世	外国語教育論、ライティング教育	
	講師	サンフォ ジャンパティスト	教育開発、教育品質	
	講師	真島 アマンダ	英語教授法、応用言語学	
地域共生センター	講師	近藤 佑樹	アメリカ文学、アメリカ文化	
	教授	鵜飼 修	都市計画・建築計画、地域研究、地域計画、地域活性化、環境共生まちづくり、コミュニティ・ビジネス	
地域ひと・モノ・未来 情報研究センター	講師	上田 洋平	地域学、地域文化学	
	准教授	杉山 裕介	偏微分方程式	

※詳しい研究者情報は、ホームページ (<http://db.spins.usp.ac.jp/>) をご覧ください。

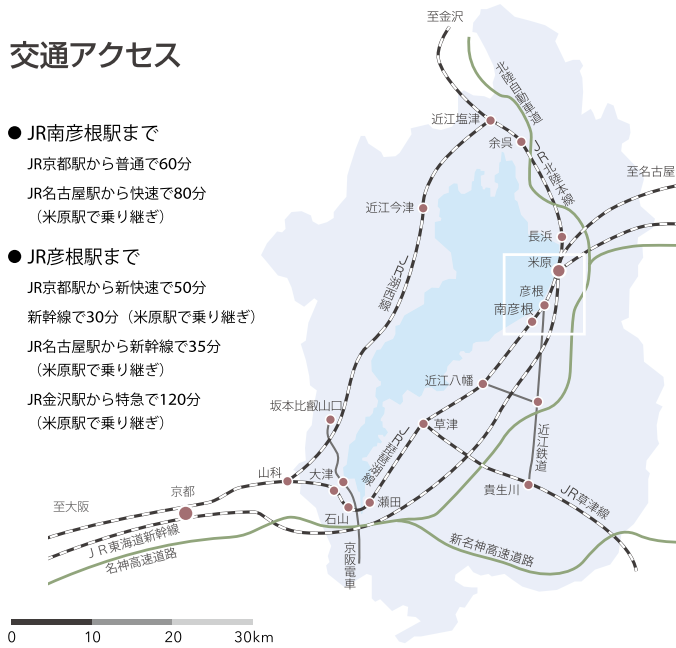
交通アクセス

● JR南彦根駅まで

JR京都駅から普通で60分
JR名古屋駅から快速で80分
(米原駅で乗り継ぎ)

● JR彦根駅まで

JR京都駅から新快速で50分
新幹線で30分 (米原駅で乗り継ぎ)
JR名古屋駅から新幹線で35分
(米原駅で乗り継ぎ)
JR金沢駅から特急で120分
(米原駅で乗り継ぎ)



大学周辺マップ

● JR南彦根駅から大学まで

バスで15分 (南彦根駅西口：南彦根立大学線)
タクシーで10分

● JR彦根駅から大学まで

バスで25分 (彦根駅：三津屋線)
タクシーで15分

● 名神彦根ICから大学まで

車で20分 (6.5km)



大学構内図



公立大学法人滋賀県立大学 産学連携センター

〒522-8533

滋賀県彦根市八坂町 2500

TEL:0749-28-8610 FAX:0749-28-8620

E-mail: sangaku@office.usp.ac.jp

ホームページ : <https://www.usp.ac.jp/chiikisangaku/center/>